

吉屋信子『良人の貞操』論

山田 昭子

専修大学文学部助教

1. はじめに

吉屋信子にとって初掲載となる新聞小説は、大正九年一月一日から約半年間、「大阪朝日新聞」に掲載された『地の果まで』という作品である。本作は前年の大正八年十二月に発表された朝日新聞主催の懸賞小説応募作品において一等当選を果たした。『地の果まで』は、吉屋にとって「もしこれが一位入選したら、私は生涯小説家になってゆこう」⁽¹⁾と決心した小説でもある。この当選作のおかげで大正十年七月十日から東西「朝日新聞」紙上で連載を開始したのが『海の極みまで』であり、これら二作は昭和三年、新潮社より出版された「現代長編小説全集」に収録され、吉屋はそこで得た印税でパリへと旅立った。

以降、吉屋の新聞小説は昭和八年二月十一日から「報知新聞」に掲載された『理想の良人』まで待たねばならな

い。それは、大正末期以降、婦人雑誌への執筆がたび重なったためである。昭和の始まりとともに終わりを告げた『花物語』の連載以降、吉屋は「少女小説の筆を断つて、大人の小説の世界へ専心したい——」⁽²⁾と願いながら、「大人の小説の場合にも、少女の方達への作品の場合にも同じ心持と努力で」臨むことを決意する。このように吉屋の昭和の仕事は「少女の友」や「少女倶楽部」に長編少女小説を執筆するかたわら、「主婦之友」や「婦人倶楽部」などの婦人雑誌にも同じように連載物を書き続けることであった。

昭和八年に『理想の良人』を書いた吉屋は、その三年後の昭和十一年に二本の新聞小説連載を走らせている。その一つが「読売新聞」に連載した『女の階級』、もう一つが「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」に連載した『良人の貞操』であった。

『良人の貞操』は、邦子の良人である信也と、加代が通じてしまうことで物語が大きく展開していく。この三角関係において重要なのは、邦子と加代が親友同士であるという点だ。邦子と加代は様々な点で対照的に描かれているが、物語の振幅を作り出しているのは加代である。本論ではまず、プレテクストともいべき作品群との共有事項が『良人の貞操』に至ってどう変化し、取り込まれていったのかを見ていく。この物語における加代は極めて流動的な存在であり、遍歴する人物として描かれている。流動的な女はそれまでも吉屋作品に登場していたが、初めて帰着点が示されたことで、加代はその集大成ともいべき姿として描かれている。加代を軸に本作を読み解くことで、加代の遍歴の物語がいつ終わりを迎えたのか、その目的は何であったのかを考察していく。吉屋は加代を描ききることでは得たのか、その後の作品とどう接続するものであるのかを明らかにしたい。

2. プレテクストとの関係

邦子と信也は結婚四年目であり、子どもはない。いつもの夫婦の朝の情景は、信也の出勤後、舞い込んできた一通の電報によって破られる。「タミオサクヤキユウビヨウニテシス」と打たれた電報の差出人は、邦子の女学校時代の親友である加代だった。この作品の最も大きな特徴は前述の通り、邦子と加代が親友同士という関係にありながら、加代が親友の良人である信也と通じ、妊娠するに至る、という点にある。つまり、加代は邦子にとって良人を奪う側の人間であるが、こうした二人の女友達と一人の男の関係は、それ以前の吉屋作品にも何度か描かれている。『良人の貞操』のプレテクストとしては駒尺喜美が『女の友情』を挙げ、田辺聖子が『暴風雨の薔薇』を挙げているが、昭和八年「主婦之友」に掲載された『二つの貞操』もまた、『良人の貞操』のプレテクストとして挙げられるだろう。

『女の友情』では、綾乃と由紀子が、互いの想い人が共通の人物（慎之介）であることに気付かないまま物語が進んでいくが、その後の展開は、綾乃の死と由紀子の修道院行きによって二人の女たちの衝突が巧みに回避されたとはいえる。その意味では、親友不二子の良人である守彦と、不二子の親友濤子が互いに想いを通わせてしまう『暴風雨の薔薇』や、親友関係ではないながらも弘志という一人の男を巡って、妻である總子と日陰の女となった紀美子という二人の女を描く『二つの貞操』の方が、男女の関係性の中に一組の夫婦を置くことで、事態をより深刻に描いており、『良人の貞操』に接近しているといえる。

『良人の貞操』の加代は、先に結婚していた邦子夫婦の媒酌により、民郎と夫婦になった。民郎は邦子の良人で

ある信也の従兄弟である。本作は連載当初より読者の関心を集め、その関心は邦子と加代二人のヒロインに集中していた。しかしテキスト内の大きな流れを作り出しているのは加代のほうである。それはひとつに加代が流動的な存在であるということによるだろう。加代は結婚当初から、福岡の炭鉱で暮らしていた。民郎の死をきっかけに邦子のいる上野桜木町へ引っ越したのち、信也との距離を深め、妊娠する。産後の保養で訪れた鶴沼で出会った由利準吉に見初められ、最後はマニラへと旅立っていく。こうした加代の物理的な移動と男性遍歴をとらえてみるだけでも、加代がいかに流動的な存在であり、対する邦子が滞留的な存在であるかがわかる。『良人の貞操』はいわば加代という一人の女の遍歴物語として読むことができ、同時に民郎、信也、準吉という三人の男たちとの関係性の中で大きく三つに分けてとらえることができるが、実はこの流動的な女は『暴風雨の薔薇』において既に登場している。

「私、この歌大好き——私もジブシーの仲間に入って、流浪して見たくなるの……」

不二子はピアノの横を離れつつ、生真面目な顔で、もっともらしく言う。

「傍から見ているから、ジブシーのさすらいの生活も、ロマンチックなのでしょう。当人達は、きっと普通の人の生活を羨んで山毛櫨の森蔭で泣いているかも知れないわ……」

滯子も鍵盤を閉じて立ち上りつつ、こう少し年齢上の姉らしい口調で、それに応じた。

ここで不二子が歌ったのは「流浪の民」であり、不二子はその歌詞に憧れている。だがのちに流浪の民となるのは不二子の良人の心を奪う立場にある滯子の方であるという転倒がここにはある。滯子は手紙を残して行方知れず

となり、「流浪の民」となってしまうわけだが、『良人の貞操』の加代はマニラという新天地において未亡人から人妻へと転身をはかる。自分の居場所を見出し、そこに落ち着くのである。では、加代とはどのような人物であるのか。その遍歴に大きく関わる三人の男性との関係性、そして親友である邦子との関係性から加代を見ていく。

3. 民郎と加代

加代はもと深川の材木問屋の一人娘であり、震災をきっかけに両親を失つてのちは、たった一人の縁者である叔母のもとに身を寄せていた。民郎と結婚後ほどなくして静江をもうけ、民郎に死なれてのち、義父である兵助の住む北海道で短期間過ごしたあと、邦子たちの住む桜木町へと上京する。加代の良人である民郎の描写は、加代や信也の口から語られるにとどまり、間接的な描写しかない。そこから浮かび上がってくるのは、加代を見初め、強引に妻にと願ったにもかかわらず結婚後は酒におぼれて妻子に暴力をふるい、通夜場でさえ悲しむ者がおらず、実父である兵助からも見放された息子、という人物像である。民郎は加代との関係においていわゆる悪夫として描かれているわけだが、物語の中盤、互いの想いを確認した加代が信也にもらす自らの胸のうちは、新たな事実を浮かび上がらせる。

信也は加代の烈しい希冀の前に、わずかに抗議した。

「いいえ、違わないの、私が悪い女だからなの——信也さん、私、貴方が邦子さんと結婚なすって直き、初めてお眼にかかった時から——民郎とのお話も、ただなんとなく貴方の従兄弟というのに惹かされて嫁く気になったの——でも駄目、民郎も不幸に

しました、私も不仕合せ——この頃になって私にやっとそれが分ったの——」

ここでの加代の告白は、自らの結婚の不幸が、民郎一人によるものではないことを裏付けている。信也への想いを抱きながら、信也の従兄弟であるという理由で民郎のもとへ嫁いだ加代は、民郎をいわば信也の身代わりとしていたのであり、民郎は最後まで良人として妻に愛されることなく終わってしまった、結婚生活のもう一人の犠牲者であるともいえよう。このことは、物語の後半で生じる睦子の結婚話が補強となっている。睦子の結婚相手となる達郎は、かつて睦子の姉である邦子に恋心を抱いており、睦子はそれを承知のうえで「私はその身代わりよ」と嫁ぐ決心をする。だが、睦子の結婚に対する姿勢に悲壮感は見られない。それはひとえに邦子と加代の物語の裏で、睦子と達郎の順調な交際期間をほのめかす物語の存在があるからだ。睦子と民郎は身代わりとしていわば同じ立場にあるが、一方に結婚の悲壮感が感じられないのは、身代わりであることを知ったうえで新しい関係性を築くことのできた睦子の適応能力の高さのせいであろう。睦子と達郎の婚約成立のエピソードが幸福に描かれるほど、もう一人の身代わりであった民郎の辿った不幸な結婚生活の悲しみが際立つのである。

民郎の死によって、一時義父の住む北海道へと身を寄せていた加代は、突如上京するが、その理由は作品の終盤、兵助の告白によって明かされる。兵助は加代を連れて博多から北海道へ帰る途中、加代の放つ色香に惑いそうになり、「男の一期の浮沈」だと憂いて加代を遠ざけたのである。その結果、加代は上京し、信也と葬儀以来の再会を果たす。邦子の家に親しく出入りを始めた加代は、夫婦からも信用を置かれ、邦子の父である専介が病に倒れた際は、鎌倉に帰省する夫婦の留守を預かるまでになる。そのことが加代と信也をますます近づけるきっかけとなるわけだが、二人を近づけた直接のきっかけとなってしまいう人物が、加代の義父である兵助と、邦子の父である専介で

あるという皮肉がここにはある。

加代は、邦子の親友と信也の恋の相手という二つの立場を併せ持つ。つまり、この物語は加代によって作りだされた振幅の中で、信也と邦子によってまなざされる加代という一人の女が描かれているともいえるのである。それでは、次に民郎の死後の物語を読み解くために、信也と邦子が加代をどのようにまなざしているのか、以下に見ていく。

4・信也と加代

信也との関係性を考える際に、信也がなぜ加代に惹かれたのかを考える必要がある。作中、加代は何度となく未亡人として男たちから性的にまなざされる姿が強調されている。それは兵助も理性を失いかけた加代の持つ美貌であり、自身が意識せずとも周囲にそう読み取らせる何かが加代の中にはあると考えられる。吉屋は加代の色香を表現する際、色彩と香りを巧みに用いていることがわかる。次の描写は、信也と加代が初めて顔を合わせる場面である。

すると、続いて、消しの緋の黒の上布を、すらりと身に纏って、帯も黒縹子、すっかり黒ずくめの姿に、顔だけくつきりと、葉蔭の白い椿の花のような、若い女性が立ち出でた。

民郎の葬儀のため、福岡に向かった信也は、喪服を身に着けた加代と再会する。ここで加代の着る喪服の黒は未

亡人としての立場を示すものであるが、そのことによって加代に加わった未亡人という新たな付加価値こそが、私たちの性的な視線を集めることにもなる。

通夜の客は皆がやがや雑談を交し、笑い声さえ時々起きた。加代がものを運んで立ち去る、すらりとした黒上布の後姿を見送りながら、

「仏も心残りでしような」

と、眼で卑しく笑う男があった。

それはひとつに加代の持つ美貌が考えられるが、若くして良人を失った若き未亡人という加代の陥った境遇にこそ、男たちは扇情的な視線を向ける。加代は幾度となく男たちのこうした視線にさらされ、同時にそれらを跳ね除け、時には悔し涙をも流している。次の引用は、加代が勤めに出た東洋電化の取引先のブローカーに騙されて呼ば出されたことを加代が知る場面である。

「ハ、ハ、、そないに怖がらいでも、よろしやろ、専務はんの名刺の古いのちよつと使わせてもらつたんや、どないしても、あんたに来てもらいたかつたのだ——さアさアそない遠慮せんとお入り……」

と、粘つたものの言い方で、ふらふらと立つや、加代の手を取って引き入れようとした、その瞬間、前川の片頬がびしやりと小気味よく鳴るほど、加代の女の白い手が、す早く彼を打つたのである。

この直後、加代は帰宅早々手を洗い清め、静江を抱き「静ちゃん、なぜ女に生まれて来たの、母さんに似て運が悪かったらどうしよう……」とつぶやき、涙ぐむ。ここには本人の意志とは無関係に性的な視線を向けられてしまう、加代の理不尽な状況が描かれている。

加代は哀れな未亡人として信也と再会した。想いが通じ合った二人は、邦子に隠れて密会を繰り返す。信也のために示す加代の恋心は、信也の言った「加代さん、貴女はそんな黒いものが、よく似合いますね、不思議だな」という一言を素直に聞き入れることによっても示されている。ここで注目したいのは、この加代を示す黒のイメージの多くが、信也の前で強調されているという点である。つまり加代にとって黒とは、信也との結びつきを演出する色なのである。

しかしそれだけでは加代は単なる哀れな美しき未亡人に過ぎない。信也の性的欲望を刺激するトリガーとして、吉屋は加代の放つ芳香を巧みに使っている。次の場面は、葬儀の際、加代に接近した信也が感じた竜涎香の香りである。

すぐ信也の左腕へ黒紗の布を捲いて、針で荒くかがるあいだ信也の胸近く女の黒髪と白くか細い項が、そして竜涎香の仄かな薫が漂った。

実はこの「竜涎香」は『一つの貞操』において既に登場している香りでもある。

その良人の脱ぎ棄てた背広に刷毛をかけて、洋服筆筒に納めようと、甲斐々々しく總子がワイシヤツやネクタイまで始末しか

けたとき、良人の身に着けた服から、かすかに仄かに匂ふ香——（竜涎香！）

（中略）

しかもその香水は、總子の使はぬもの、總子の日常きまつて使ひつけてゐるのは、仏蘭西ウビガン製のジャスミンだつた。まるで匂ひが違ふ——妻の我が身の香水の、良人に移り香するなら不思議はない。だのに、二日の旅を終つて今帰り来し良人の身辺に心憎き（竜涎香）の移り香仄にたちのぼるとは——

「竜涎香」の香りの主は紀美子であり、妻からすれば、いわば良人を奪う側の女である。つまり『一つの貞操』において竜涎香の香りは裏切りの香りとして妻に印象付けられている。ここでは妻が良人から竜涎香の匂いを感じ取ったことから、良人の働く不貞が露見するという展開を招く。妻が良人の纏う竜涎香に気付いたのは、自分がいつも付けている香水とは異なるものを良人から感じたからであり、普段から香水に接することの多い女だからこそ気が付く良人の変化である。『良人の貞操』では、男である信也が加代の用いる竜涎香の香りに気付く。そのことを可能にしたのは、石鹼工場で働く技師という信也の設定である。だからこそ、信也は加代の纏う香りが「この社宅の生活には、すぐわぬ贅沢な匂いもの」でありながら、「加代の嫺やかな姿」にはぴたり似合う香りであるということまで認識することができたのである。

民郎の葬儀の準備に追われる信也と加代の場面では、黒という色と、竜涎香の香りの描写が、何度となく強調されている。この時点では民郎の妻に対する仕打ちの数々は明かされていないため、加代の着る喪服の黒は良人を失った未亡人の悲哀として信也の中に印象付けられているといえる。だが、そのことは既に加代がこの時、妻の親友として以上の存在として信也に意識され出していた可能性をほのかしていたのではないか。なぜなら、のちの信

也のある行動を考えた際、その推測が充分可能となるからである。

次の引用は、加代の妊娠が発覚してのち、夫婦仲がうまくいかないまま、邦子が編む赤ん坊の産衣を見て、信也がやり場のない思いをぶつけたあとの場面である。

「うん——お前こそ——いろいろ大変だと思っているんだ——」

信也は、再び優しい良人に返って、妻の言うままに、次の間の臥床へ——すでに蚊帳は吊られて、枕許には小さいスタンドの灯、水色麻の夏蒲団も、この夏邦子が新調したもので、見る眼もすがすがしく——純白の新しい敷布、枕覆いには、涼味を誘うさりげないオードロンがほのかに匂って、夏の宵の閑やかな感触……。

実はこの場面は、邦子が初めて匂いというものを信也の前で用いた重要な場面でもある。このあと、信也は邦子を抱こうとするが、邦子は「わたくしが子供を生む身と思って」と良人を遠ざける。それを聞いた信也は、妻の持つ「清純さと正義感」に打たれるが、邦子の言葉は「清純な哀れなほどの、優しさ」に満ちている。邦子は傷ついているが、その背後に漂うほのかなオードロンの香りは、傷心の妻の清純さを示すかのような爽やかな香りを演出している。いわばコロンの香りは、妻の清純さを示しながらも、その背後にある女の不幸と結びついているのである。それは民郎の葬儀で目にする加代の未亡人としての悲哀と、竜涎香の香りが結びついたことと共通する。女の不幸と香りが結びついたとき、信也の男としての欲望は刺激されるのである。

では、加代は何故信也に惹かれたのだろうか。信也と二人きりになった加代は、「私みたいな運の悪い女が、この先いつまで生きたとて、どうなるんでしょう……」と胸の内を告白し、死を口にする。そうした加代の「投げや

り」な発言は、信也を憤らせ、二人の距離は一気に縮まる。

いきなり頭から、がんと叱り飛ばされて、下うつむいた加代の前に、信也は膝を正した。

「貴女は運が悪いのは自分一人のような顔をするが、世の中にそう運のいいやつばかり、端から揃ってますか、みんなそれぞれ不満で不平な生活をあぐ、せくやっているんです、（中略）そこへゆくと、貴女なんか何が不足です、そりゃ良人に死別したのは不幸かも知れんが、世間にはそうした人はいっぱいいます。（中略）それを（死にたい）とは、一種の感傷を楽しんでいるようなものだ、僕は貴女のそんな莫迦げた感傷を軽蔑しますよ、そんな気持で今貴女が暮しているとしたら、僕も邦子も不安だ、帯広の伯父から貴女たちの保護万端を頼まれているんですからね、加代さん」

「癪癪を起した男の顔」を加代はじつと見上げる。ここでの加代にとって「こんなに本気で怒って、心から叱って呉れる」信也は、まさに父の姿のようであるといえる。加代は「いいえ、あんなお父さんなくっても、この兎は平気だわ、ついぞ一度も、抱いてお湯に入れて貰った覚えもない兎ですもの——私小さい頃は、よくお父さんとお湯に入った……」と邦子に父親との思い出を語るが、加代が信也に惹かれた決定的な理由は、信也の持つ父親らしさにあるといえる。信也の持つ父親らしさが加代を惹き付けたという事実は、後述する準吉という男にも同様にある。ではまっているだろう。

先にも述べたように加代は邦子の親友と信也の恋の相手という二つの立場を併せ持つ。つまり加代は信也と邦子という二人によって規定される人物であるのだ。そのため次に邦子との関係性から加代について考えていきたい。

5. 邦子と加代

邦子と加代は女学校の同級生だが、卒業後は、結婚を機に会う機会も絶えてなかった。民郎の死後、一時北海道に身を寄せていた加代は兵助のはからいによつて邦子たちの住む上野桜木町へとやってくる。邦子はそこで初めて加代の結婚の不幸を知る。

邦子は加代に同情し、知らぬこととはいえ、民郎のような男のもとに嫁がせてしまったことを詫びる。久しぶりの再会である懐かしさも手伝つて、二人の距離はますます近いものとなるが、そのことは結果的に二人の持つ主婦としての能力の差をも浮き彫りにする。相当な努力をもつて良妻を演じようとしている邦子に比べ、加代はそつなく家事をこなすことができる。加代の持つ家事能力の高さは、信也にとっては「生活を楽しむ」という美点と捉えられるが、それが邦子の前で発揮されるとき、加代の持つ美点は邦子に対する嫉妬心として読み替えることが可能となる。

「貴女これ皮剥いてから、茹でるの？そいじゃ駄目よ、皮のまま、お鍋にたっぷり被るだけのお米の研汁入れて茹でるといいに」

「あらそう——じゃあ、今お米といで取つて置こう」

邦子が立ち上った。

「信也が、例の原稿書きが忙しいんで失礼しますって……」

「いいのよ、私邦子さんに会いに来たんですもの……」

と、お茶をひと口飲んで、

「邦子さん、どんな風に番茶使ってらっしゃる——すこしあの……おいしくないわ」

一つ目の引用は、「これ信也が、とても好きなの、毎日でも、これならいいのよ」という邦子の発言を受け、「また始まった、癪ね、信也々々って言わないの!」という二人の掛け合いのあと発せられた加代の台詞である。二つ目は既に信也と深い仲になってからのことであり、この台詞の直前、加代は「じつと火鉢の脇に、邦子の置いて行った編みかけの信也のセーターをみつめて」いる。これら加代の発言はいずれも信也のことが引き合いに出されたあとに発せられている。あとになって明かされる加代の信也への秘めたる想いを考えた時、これら加代の家事能力の高さは、自分より能力の劣っている邦子に優位性を示すものとしての意味合いが浮上してくる。

専介の病によって邦子が実家に帰らねばならなくなった際、留守を預かることになった加代は、「信也の書斎兼客座敷から、ずうと御台所勝手口、洗濯場の湯殿までお掃除、塵一つ止めず拭き」、家の中を整え、清めるが、その行為は家の中から邦子の気配を消し去ろうとする意識の表れともとれる。

邦子が鎌倉に帰省している間、信也は鎌倉と会社社を行き来することになるが、ある時、仕事で必要な資料を取りに戻った時、加代によって美しく整えられた家に通される。「隅に敬遠された」籐椅子は、夫婦の新婚当時から品である。加代は古びたメリンスの座蒲団を手に取り、「つくって寄付させて戴く」ことを信也に申し出る。その座蒲団は邦子が結婚後間もなく作ったものであり、これらを排除しようとする行動からは、邦子の妻としての座を

脅かそうとする、無意識の心理が読み取れるといえよう。

一方、こうした加代の言動を邦子は素直に受け入れ、助言として生活の中に取り入れている。信也との仲が発覚するまでの邦子の加代に対するまなざしに疑いはない。それは加代が純真な女として描かれているからだ。加代の純真さは、「白い細い指」や「真白な夏足袋の爪先」といった身体の部位にとどまらず、信也と訪れた座敷の名が「白菊の間」であったことを知り、「——白菊だって……はずかしい……」と臉をそめてみせる様子にも表れている。だが、加代が示す純真さは、常に邦子によって読み取られている。この物語において邦子は唯一加代の純真さを見出す同性として描かれているのである。

邦子は嬉しげだった。そして加代のそばの小さい茶棚の上に、新しく置かれた人形棚の可愛い「汐汲み」だの「浅妻船」だの「鶯娘」だのの舞姿可愛い豆人形と、その隣に立てかけてある「道成寺」の立派な押絵の大きな羽子板を眺めて、

「まあ、貴女ったら、いつまで娘らしいもの好きねえ」

道成寺の押絵には、男への情念を捨てきれない女を暗示するものとしての意味が隠されている。だが、邦子が読み取るのは加代の持つ純真さである。それは一つに、邦子の同性に対する疑いを知らない経験の浅さを意味するものであるかもしれない。しかし裏を返せば、加代のそうしたふるまいの中に清純さしか読み取れない邦子こそ、真の純真さを持つ女だということを示しているともいえる。

つまり、加代にとつての白とは、邦子の純真なまなざしによってもたらされる加代の純真さを示すものであり、同時に加代自身の持つ、ある性格をも意味している。次の引用は、久しぶりの再会を果たし、枕を並べて語り合っ

た夜に、加代が邦子に語った台詞である。

「——性格なんて、私そんな生意氣言わないつもりなの、私のような女は向うのひとの性格に、どんなにでも合せてゆけるんじゃないかしら——それで私は幸福なような気がするの」

「どんなにでも合せてゆける」加代の性格は、白に象徴されるように、何物にも染まり得る、柔軟性を示している。だが、一方で黒いものを身につけ、信也にふさわしい女を演じようと努める加代の姿勢は、柔軟すぎるがゆえ、自分を見失いがちな女の一面を示しているのである。

加代と信也は、邦子に内緒で行った箱根の旅行先で、義三郎に目撃されてしまう。義三郎は邦子の姉の良人であり、自身もまた妻とは別の女性を連れていることでむしろ信也に共感さえ示し、その時点で加代と信也の関係性は露見しない。義三郎からその話を聞いた妻の安子が邦子に告げ口することで二人の仲は露見する。信也の行為は女の口から語られた時、不貞となりうるのである。

暫く順調であるかに見えた邦子と加代の関係は、信也と加代の関係が明らかになることで突如壊れてしまう。二人の裏切りを知った邦子の怒りは、次のように描かれている。

昨日の朝の粉雪が、まばらに残って土はしめつっている、その庭の真中の——静江のためのお砂場の上に、信也の書斎に敷いてあった座蒲団が、ぼんと放り投げられてあった。この夏、加代が留守居のうちに、錦紗の風呂敷を二枚合せて造った、それだった。雪解けのしめりが、千羽鶴の白い翅に浸みて濡れ込んで痛々しかった。

加代の縫った座蒲団を放り投げた邦子の行為は、加代に対する嫉妬を示すものであるが、雪解け水によって濡れた千羽鶴の白い翅の様子は、それまで加代のイメージであった白という色が邦子の中で侵された事実を示している。だが、邦子は「いったんむらむらとして庭先に放り出した」座蒲団を、「さすがに、はしたなかったと恥じて」拾い上げる。本来であれば捨て置いても許しきれない親友の裏切りであるが、邦子は「二度と眼にふれぬように」しまいこむのである。座蒲団を拾い上げる行為は、加代に対する邦子の救済の意志の表れである。この行動の背景には、加代に対する憎しみだけではない、別の感情が生まれつつある事実が隠されている。信也と加代の秘密を知った邦子は、当初、信也との離縁によって解決しようとした。しかし、最終的には信也と加代を許し、加代の身ごもった子を引き取ることで、解決へと導く。つまり邦子のとった行動が、事態を左右する重要な事項としてとらえられるわけだが、果たして事態を收拾したのは本当に邦子の行動なのだろうか。

6. 辰という女

加代と信也の関係を知った邦子は実家である鎌倉へ向かう。そこで傷心の邦子を受け止めたのは女中の辰であった。辰は邦子をかばいつつ、加代と同じ「女」として庇護する発言をする。

「ま、まあ、それほどの事をした女が、そう申しましたか、やっぱり女はしおらしい……女にはしんからの悪人はござんせんね、強盗も人殺しも、ありや皆たいてい男の仕業でござんすもの……」

辰は襦袢の袖口で眼のふちを拭きつつ、

「邦子様、さっぱりと許してやっておしまいなさいまし、そうまで悔いて詫びる女をいつまで許さぬとて、それで仕出かした事が消えるものでもなし、お情深い神様のお心になったつもりで、許しておあげなさいましよ……」

この後、邦子は少し落ち着きを取り戻し帰宅する。修復不可能かに見えた夫婦の関係であったが、邦子は信也の母となったつもりで現状を考え、事態の収拾につとめようとする。母という設定は、邦子が三姉妹の中でも特に母親に似ているという事実と密接に関わっている。邦子の母について語られるエピソードは少ない。だが、その中で浮かび上がってくる邦子の母の役割は邦子の負わねばならない役割と重なってくる。姉の安子がお産でないのを良いことに言い寄ろうとした義兄の義三郎にショックを受けた邦子は、「お酒のせいだよ、だけどたとえ戯談でも、安子を知ったら、産後の血があるから、我慢して忘れてやってお呉れ」という母の言葉でその場の気持ちをさめる。ここで浮かび上がってくる邦子の母の役割は許す母としての役割である。邦子は三姉妹の中でもっとも母に似ているからこそ、母の役割を受け入れやすく、許す母としての役目を信也に果たすことができたのである。

こうして解決したかに見えた状況は、加代の妊娠によって一変する。邦子は自分の子として育てる決意をすることで事態を解決へと導くが、信也から「自分を裏切った女の生んだ子供」を心から愛し育てられるかと問われ、煩悶する。その時邦子を救うのはまたしても辰の言葉なのである。

「邦子様、私がこちらへ御奉公にありました時は、なんにお子様を可愛ゆいと思って参ったわけではございません、(中略)可愛がろうの、可愛く思おうのと、無理につとめて出るものでなし、それは、もうなんともかんと、理窟で言い切れぬ、人間の情愛でございますよ——邦子様、まして赤ちゃんの時からお膝に抱いてお育てになったお子なら——生みの母より育ての母——」

こうした辰の発言は、邦子に加代に対する態度を懐柔させ、子どもの母となり、夫婦の関係と友情の回復へと導いていく。つまり邦子の判断の裏には辰の発言があったのであり、辰の存在こそが邦子と信也の夫婦関係を修復し、邦子と加代の友情関係を回復したといえるのである。

では、辰とはどのような人物なのであろうか。辰の素性は作中、詳しく語られておらず、年齢や出身、未婚か既婚であるかについても定かではない。邦子の弟の幸一が生まれてから現在まで奉公し続けている人物であるという以外の情報は明かされないのである。まさに辰は、ご都合主義の登場人物、邦子と加代と信也三人の関係をたちどころに修復させうる、デウス・エクス・マキナのような存在として舞台に舞い降りる人物であるといえる。

ここまで、信也と邦子から見た加代について考察してきた。では、加代の遍歴物語の三番目に登場する男、準吉との関係性はどのように描かれているのであろうか。

7. 準吉と加代

産後の保養のため、鵜沼で暮らすことになった加代は、静江を助けてくれた縁で由利準吉と出会う。準吉は私生児として生まれ、母を失ってから海外を渡り歩いて木材の貿易に従事する男であり、二十年ぶりに帰国したところであった。彼もまた遍歴する男であるといえよう。加代の飾り気のない態度に惹かれた準吉は、出会ってすぐ、加代に結婚を申し込む。準吉に対する加代の態度は、信也との過去をも包み隠さず話そうとする姿勢に示されるように、常に解放されている。邦子からすればその行動が、「困った気性のひと——我から運をいつも取り逃がして……」という想いを抱かせるが、結果的に準吉の前で示す加代の態度こそが、加代が自分らしさを取り戻すきっかけ

けとなる。

準吉についてマニラに旅立つことになった加代は、船の上から見送りに来た邦子たちの姿を認める。

甲板の欄に背のびする恰好で、静江が小さい両手に五、六本慾張つてテープを一緒に握っている、その隣に加代が、これはただ一本だけ白いテープを指先で抑えていた。

加代の指に、静かに大切に引き続けて来た白のテープも——やがて切れた……

ここで切れた加代のテープに象徴される白さは、先にも述べた、「どんなにでも合せてゆける」加代の性格を示すものである。どんなにでも合せてゆけるという加代の自負は、自分らしさを押し殺し、結果的に民郎との結婚をも不幸なまま終わらせてしまった。加代の手の中の白いテープが切れた瞬間、それはかつての偽りの自分との決別の瞬間を示しているのである。

乗船して暫くのち、加代は船の上からあるものを落としている。それは黒い天鵝絨のコートと温室咲きの萼である。コートは信也に買ってもらった思い出の品であり、加代にとっての「恋の墓標」であった。温室咲きの萼は立ち寄った上海で準吉が加代に与えたものであり、既に枯れかかっている。黒いコートを捨てるという行為は、加代にとって信也との恋愛を過去のものとして海に捨て去るという行為に通じる。だが加代は何故温室咲きの萼をも共に捨てたのだろうか。それは加代が作中何度も花にたとえられていることから分かる。

対する邦子は、花にたとえられることはない。二人ともにその美しさが描写される本作にあって、花にたとえて

示す加代の描写は単なる華やかさを示すものではない。花は邦子と加代の差、実を結ぶ、すなわち受胎しやすい身体を暗示してもいよう。つまり温室咲きの堇は加代自身を示すものであり、枯れてしまった花の様子は、信也との恋によって疲れ果てた女の姿を現している。

船から陸地へと降り立った加代が眼にしたものは、色とりどりの街並みであつた。その描写に吉屋は再び色を用いることで、加代の立場を結論付けている。

ピークの頂上からの帰りを、青いエメラルド色の海に添い、花壇を前にした美しいホテル・リバルスベイに車を廻させて、ヴェランダの椅子に憩つた。ちょうど三時のお茶時で、外人の客が、あちこち動いていた。

青い海と、さわやかな太陽と、そして不思議な童話の国に咲くような花の色に——加代は未知の国に一步入つた夢心地で、船酔いも完全に忘れて、身体がしゃんとなつた。

ここで示される青という色は、加代の持つ性質を示す重要な色でもある。かつて邦子と着物の展示会に出かけた加代は、そこで見つけた白地に青海波の地紋のついた着物を手にし、「私これを青一色に染めて着よう」と邦子に話している。のちに染めさせた青い着物は、信也との密会の際に登場する。

加代が面映げに——それは、いつぞや、衣裳展覧会の特売の白いものを青一色に染めさせただけが——加代がひとたび身につけると、断然光を放つて、その姿は、美しい鶴鴒の精のように優しく夢のようだった。

ここでの青い着物は、加代の持つ本来の性質を象徴している。信也と深い仲になった加代は、信也にとってふさわしい女になろうと努め、黒を意識的に取り入れるが、邦子との買い物の際、加代が自分の意志で選んだ色は青であった。加代の持つ本当の色とは黒でもなく白でもなく青だったのである。ほどなくして青にまつわる加代の描写はとどえるが、外国の地に到着したと同時に加代の眼前に広がる青い世界は、異国での解放感を示しているだけではない。それまで黒と白だけであった加代の世界が、文字通り自分の色を取り戻したことを示すのである。加代は次第に準吉に心を開いていくが、その理由は何であつたのだろうか。次の引用は、プールで戯れる静江と準吉の描写である。

「そら、もう手を放すよ、一人で浮いてみるんだよ」

準吉が、手を放しかけると、「あッ、怖いッ」と、静江は彼にしがみついた。

「ハ、ハ、莫迦だなあ、親爺が付いてるのに」

準吉は笑って、水の中から女の児を抱き上げた。「だって、怖いのよオ」静江は甘えて、彼の首ツ玉にかじりついた。

この二人のやり取りを見た加代は、「眼の奥が熱く」なる。ここでの準吉の振る舞いは、静江に対して発揮される父親らしさを示している。プールではしゃぐ静江の姿は、かつて父親に入れてもらった風呂の思い出を加代に髣髴とさせたであろう。つまりこの場面は加代が自らの過去に重ね合わせ、静江と同化する形で準吉を受け入れた瞬間なのである。その後、準吉に向けられる加代の視線にはある変化が見てとれる。

しばらく、静江を水の中で遊ばせたのち、準吉はプールからあがって来た。浅黒い額に濡れた髪が垂れ、水にひたって光る男の四肢は、黒く筋骨質にきたえられて、青銅の彫刻の動くようだった——加代は慌てて臉を伏せて、静江を受け取った。

ここには異性に対する欲望の視線が見てとれる。だからこそそれに気付いた加代は「慌てて臉を伏せ」るのである。加代は信也に初めて抱かれた際、「民郎との結婚生活で、その初夜からついぞ一度も、しんから女になれなかった身」を思い起こし、頬を熱くする。いわば加代は信也によって、男から与えられる肉体の悦びを知ったのである。信也にとっては皮肉にもそのことが加代を次の男へと旅立たせるきっかけとなったのである。準吉の持つ身体は、信也以上に肉感的に描かれているが、信也によって開花された男に対する性的な加代のまなざしが、同時に準吉の魅力を高めてもいるのである。そのことを示すかのように、その夜行われた大晦日の夜のダンスの場面では、さらに加代の持つ性的なまなざしが強調されている。

たくさんの外人にも見劣りせぬ気魄を持つこの日本の男は、マニラの太陽と海風に鋼鉄のようにたたき上げた丈の高い身体を悠然と運ばせて、異国の女と踊る群れに入った。

胸を豊かに盛りあげた、逞ましい肉体を、黒と銀のイヴニングドレスに包んだその女は、準吉に巧みにリードされて、楽しい何かに話しかけている。

加代が、ホールの片隅の椅子に掛けて、じっとその準吉の姿を追っていると、彼も、ゆるやかなステップを踏みながら、時々加代の方へ男の眼の優しさをこめて笑いかけた。

肉感的な異国の女と筋骨逞しい準吉のダンスは、加代の視線を通すことで、限りなく性的な連想へと発展していくかに見える。加代と準吉の視線が交差する瞬間、それは二人の肉欲が絡み合う瞬間であり、その後、加代はその場から姿を消し、黒天鵝絨のコートと温室咲きの萼を手甲板へと立つ。加代を探しに来た準吉が部屋に戻ろうとした時、加代は初めて自分から「入っちゃ、いけません?……」と瞼を伏せて、薄赤くなるのである。

8. おわりに

準吉は加代の父との思い出を想起させるだけの存在ではなく、本作において信也によって損なわれた「良人の貞操」を回復する役割を担っている。それは、準吉が良人に裏切られた妻によって育てられ、その母の悲しみを知っている男だという人物背景に由来するものである。

この物語において、母は重要な要素を持つ。邦子は信一の誕生によって母となり、加代は準吉の亡き母の倅として母であることを求められているといえ、ここに二人の新たな母親が誕生するわけだが、反転すればこれを信也と準吉という二人の父親を誕生させた物語と読むこともできる。加代の遍歴の旅は、自らの父親との思い出を求める父親探しの旅の物語であると同時に、二人の父親をも作りだした。『良人の貞操』とは加代の父親探しの旅の物語であり、準吉という新たな父親にたどり着いた時、加代の旅は終わったといえるのである。

加代は準吉と旅立った船の上から信也に買い与えられた黒い天鵝絨のコートと、立ち寄った上海で準吉に買い与えられた温室咲きの萼を捨てている。先に述べたように黒いコートを捨てるという行為は、加代にとって信也との恋愛を過去のものとして海に捨て去るという行為に通じ、温室咲きの萼は加代自身を示しつつ、枯れてしまった花

の様子は、信也との恋によって疲れ果てた女の姿を現している。それらを捨て去ることが加代にとって過去との決別になったことは間違いないが、準吉に与えられたのが「温室咲き」の莖であったことは、もっと注意しても良いのではないか。

なぜなら温室の中で囲われて育てられた植物は、信也という男に囲われた女としての加代を想起させるからだ。準吉によって与えられたその花を受け取るという行為は、加代が自身の過去を受け止めたということだ。その花が枯れた時、加代は自らの手でそれを捨て去り、ありのままの姿でいられる男、準吉と共に歩む決心をするのである。女のリアリティを吉屋がどこまで描き切ろうとしたかについては考察の余地があるが、後年、『徳川の夫人たち』や『女人平家』、『女流文壇史』などの実在の女性に迫ろうとする吉屋の作品傾向を考えた時、作られた女を脱しようとする意志の片鱗が加代という女の中にすでに見て取れるのである。

注

- (1) 「懸賞小説に当選のころ」〔朝日新聞〕昭和三十八年一月十九、二十日
- (2) 吉屋信子『三つの花』（講談社 昭和二年）
- (3) 駒尺喜美『吉屋信子——隠れフェミニスト——』（リプロボート 平成六年十二月）
- (4) 田辺聖子『ゆめはるか吉屋信子——秋灯机の上の幾山河』（下）〔朝日新聞社 平成十一年九月〕

本文の引用は『良人の貞操』『暴風雨の薔薇』を朝日新聞社版『吉屋信子全集』三巻、五巻、『一つの貞操』を新潮社版『吉屋信子全集』二巻に依った。